

平成27年度の事業報告書

平成27年4月1日から平成28年3月31日まで

法人名 特定非営利活動法人モースト

事業の成果

■イラン訪問 毒ガス被害者交流・映画祭 2015 打合せ・医療支援ほか(5月10日～20日)

到着翌日、テヘラン・ピース・ミュージアム(TPM)を訪ね、初めて訪問した当会メンバーに、毒ガス被害者でピースボランティアガイドから毒ガス被害の状況を説明していただきました。その後、「第2回広島イラン愛と平和の映画祭」(8月1日～7日、広島市中区八丁座)の打ち合わせを行いました。

今回、毒ガス被害者との交流が12年目となり、これまで広島を訪問した参加者が家族同伴で集まり、当会メンバーを迎えてくださいました。大変残念なことに、そこへ参加できなかった2人がいます。毒ガス被害者でTPMのピースボランティアで2014年来広し、2015年に亡くなられた方と、来広経験があり2014年に亡くなられた被害者です。

翌13日は、サルダシュト出身議員からイラン国会議事堂ロビーで開催中の「サルダシュト毒ガス被害者写真展」へ招待を受け、見学しました。次に、平和教育実習で広島を訪れた幼稚園長の引率で国際人形館(テヘラン市)を見学。その後、TPMで広島市内や海外の小中学生が平和をテーマに描く「子どもたちの平和の絵コンクール」(広島平和文化センター・広島市主催)の表彰式が行われました。

14日は、エスファハンの毒ガス被害者との面談へ向かう途中、イラン・イラク戦争末期の1988年、毒ガス被害で重傷を負った直後、治療のため日本へ緊急搬送された方からアラークの自宅へ招かれ、ご本人は現在体調も回復され、ご家族との皆さんとよい交流ができました。

その後、エスファハンへ向かい、市内1万人の毒ガス被害者のうち重度の被害者を含む11名と記者らが集まる面談会場へ。重度被害者の一人は「初めてヒロシマとつながりができてうれしい」と語りました。エスファハンの被害者は、イラン南部で曝露した被害者が多く、海外で手術や治療を行った人も多数。また「イラン全土に毒ガス被害者支援協会支部を作り、ネットワークを広げていきたい」「家庭が明るくなるようにしたい。道は必ず開ける」と訴えました。これに対し当理事長は12年前、偶然にもサルダシュトを訪問した際、被害者から「原爆のことは知られているが、毒ガス被害のことは誰にも知られていない。世界に伝えてほしい」と言われ、治療支援要請もあったと語りました。理事長は「その後、当会は何年もかけて小さな毒ガス被害の村を回り、その約束を果たしています。ですからみなさんもあきらめないで、ともにがんばりましょう」と述べました。(この面談は翌日のイスファハン地元紙へ掲載)。

18日は8月初旬、広島で行われる「第2回広島イラン愛と平和の映画祭」の候補作品の打ち合わせのため現地映画担当者の事務所に向かい、同施設内ミニシアターで候補作品を視聴後、監督から説明を受けました。

また、映画担当者が、当理事長が本を出版すると聞き、どのような内容か尋ねると理事長は、医療支援活動やアニメ「ジュノー」制作を通じ、何事もあきらめないで乗り越える大切さを伝え、本の中でもイランの毒ガス被害のことを知らせたい、と話しました。

一方、この日、TPMの館長から、イラン文化遺産省から第2回目となる「博物館賞」受賞の知らせを受けたと報告がありました。受賞の理由は来館数が最多、多方面に渡る創造性あるイベント開催とのこと。19日、帰国に先立ち、今年度の行事について話し合うためTPMを再訪しました。

国際赤十字赤新月社連盟テヘラン支局の看護師から、放射線被ばくや放射性物質汚染の緊急被ばく医療体制を学ぶため、広島へ医師や看護師を派遣したいと要請を受けました。帰国後、当会の津谷内科理事長へ相談することにしました。

また、8月6日前後来広する毒ガス被害者とイラン映画関係者の選考を早急に行い、連絡をもらうことになりました。

平和首長会議へ新加盟した市長も訪れ、「全加盟都市の10%の628がイランの都市(2015年4月1日現在)、『任命書』は飾るだけでなく、市長も一人の市民として活動を行うことが必要」とし、まずイランの加盟都市の中で、平和首長会議の国際的(平和)教育システムを作り、将来的に海外の加盟都市を招待したいと述べました。

次に、TPM 会長から同館のボランティアシステムについて説明がありました。平和教育など各担当に分かれ、大勢のボランティアが登録されていて、専門家の研修も受けている。特に毒ガス被害者は、ボランティアガイドとして活躍していくことで輝きを得ているとのこと。これに対し、当理事長は、若い層は横の広がりだけで終わる可能性が高いので、もっと知恵を出し合いうまく活動するようにしてみてもどうか。また、平和首長会議についても、イランの加盟都市が飛びぬけて多いことから、広島の本部へ数人派遣して研修を受けたり、イランの活動方法を紹介するのはどうかと提案しました。双方で3つの原則を掲げ、①TPM で働く戦争被害者を尊敬する ②若者の集いを行う ③(イランの毒ガス被害者のために尽力された)故行武先生を忘れない、を軸とし、また世界の平和首長会議代表がイランに集まるよう原点に戻ってがんばりましょう、と締めくくりました。

■「ジュノー記念祭」当日アニメ「ジュノー」上映会(6月7日)

被爆直後の広島に大量の医薬品を届け、治療にも尽力したスイス人医師で赤十字国際委員会のマルセル・ジュノー博士を偲び、毎年、広島平和記念公園南のジュノー顕彰碑前で「ジュノー記念祭」が行われています。(広島県医師会主催)午後は当 NPO 主催のアニメ「ジュノー」上映会を毎年開催しています。会場は広島県立美術館地下講堂で、記念祭へ出席したガールスカウトやボーイスカウト、中国新聞のジュニアライターを含む約百人が来場しました。

■広島市立東原中学校で当会理事長がアニメ「ジュノー」について講演・上映会(7月7日)

毎年7月頃、理事長が講師として広島市立東原中学校へ招かれ、上映会が行われています。

■「愛のジュノー便」寄贈(7月13日)

広島市教育委員会学事課へアニメ「ジュノー」DVD5 枚を寄贈。配布先5校に広島市立美鈴が丘中学校をはじめ同大塚中学校、同早稲田中学校、同国泰寺中学校、同湯来中学校が選ばれました。

■医師婦人会で講演「ボランティア 20 年の軌跡」(7月21日)

医師会館会議室で行われ、およそ 30 名が出席。当理事長はこれまでのボランティア活動について画像を交え説明しました。また自著の「イラン広島愛と平和の映画祭」の広報も行いました。

■「イラン毒ガス被害者とともに～海外医療支援の 20 年～」出版(7月25日)

当理事長の海外医療支援の約 20 年の節目に、これまでの思いが書き綴られた本が7月25日、全国主要書店で発売されました。活動 10 年目の挫折、イランの毒ガス被害者との出会いで「心のクスリ」の重要さに気がついたこと、アニメ「ジュノー」完成までの苦悩などが語られています。

■「第2回広島イラン愛と平和の映画祭」(8月1日～7日) イラン毒ガス被害者・映画監督来広(8月4日～7日)

「第2回広島イラン愛と平和の映画祭」が8月1日、八丁座(広島市中区)で開幕。初日の挨拶で当理事長は「去年、イランの『ファジール国際映画祭』で、アニメ『ジュノー』が特別上映されたのがきっかけで、去年の夏、この映画祭が始まりました。そのアニメ『ジュノー』がここで上映されることを光栄に思っています」と述べました。さらにイラン映画は、人が生きていく上で親子・友人・自分自身の愛を背景に、テーマを深く掘り下げて描かれています。当会がイランの毒ガス被害者の医療支援を行うことから、去年は被害者をとりあげた戦争映画が多く上映されました。今回は趣向を変え、自信を持って広島からから多くの人へ発信できる作品探しから開始。国内の映画祭

やイランを訪れ作品を視聴し、専門家から推薦を受けた中から上映作品が選ばれた、と語りました。

8月3日夜半、イランから第1陣5名が広島駅に到着し、翌8月4日、広島女学院大生を中心にイランを理解する会「わ Wa - 輪・驚・和 - イラン×広島 イラン料理を食べませんか？」が広島市留学生会館で開かれ、イラン人留学生がイランについて説明し、イランから来広した5名が会場入り。盛大な歓迎を受けました。その後イランの家庭料理「クク」(マッシュポテトを揚げたサンドイッチ=モスリムのハラール食を考慮)を調理。その間、映画監督ら4名が壇上に上がり簡単な自己紹介を行いました。また、3歳で被爆した広島の女性がイラン人映画監督らのテーブルで体験を語り、みな真剣に耳をかたむけていました。また、当理事長が画像を使い毒ガス被害の講義を始めると、被害状況を初めて見る日本人参加者は真剣なまなざしでした。

その後、「クク」の昼食が出来上がり、日伊両国民がおいしそうにほおばりました。

夕方、いよいよ監督らの本番初日。この日から各作品上映後、監督とコーディネータのショーレ・ゴルパリアンさんによるティーチ・イン(Q & A)が始まり、初回は「霧と風」。上映後、モハammadアリ・タレビ監督は「悲惨な戦争終焉後の日常生活をテーマにした作品」と述べ、戦争シーンはあえて撮らなかった。「みな心の傷を負い、いくら美しい環境で平和な暮らしをしても、戦争の傷跡からはなかなか立ち直れないのが自らの疑問…」と語りました。ラストシーンで、主役の弟で聴覚障害の男の子が、ガチョウが飛んでいく姿を見て「白い」と、初めて声を発しフェードアウト。会場にホッとした空気が一瞬漂いまいした。監督は「白は平和の象徴。8・6式典には白の服で参列します。平和を守る広島に来て、とてもうれしいです」と述べました。また監督は学生から「若い僕らに何を望みますか？」という質問を受け、「子どもを愛する親に対し、愛を返さなければならない。愛を忘れてはならない」と語りました。

2作目は「花嫁と角砂糖」。ミルキヤリミ監督は現在のイランの映画製作の状況について、約2年前から製作が活発になり、国内年間約百本が作られていると述べました。他の映画祭では、「花嫁と角砂糖」のような生死や愛の強さを表すジャンルの作品を紹介する機会がないので、ぜひこの映画祭を続けてほしいと述べました。深夜、イランから第2陣が到着し、当初予定の18人全員がそろいました。

8月5日早朝から大久野島へ向かいました。イランの毒ガス被害者治療に献身的だった故・行武正刀先生の三女(医師)とご主人(医師)が赴任先のシンガポールから一時帰国し、毒ガス資料館の展示物や大久野島の被害や治療について、医学的な見地から説明してくださいました。「イランの毒ガス患者さんの容体を知ることは世界の平和につながる」「広島大が毒ガスの発ガン性を世界で初めて発見しランセット(医学雑誌)へ掲載した」と若い医師夫妻が語りました。

このあとイラン化学兵器被害者支援協会兼テヘラン・ピース・ミュージアム会長アリレザ・ソルシュ医師と平和首長会議事務局担当モハammad・レザイさんは、松井一實市長表敬訪問へ。今回で12回目となる会談で市長は「イランは周辺地域で平和首長会議加盟都市召致に大変優秀な成績を残していて、事務局のTPMが広島市と関係を持ってくださっていることに対し、お礼を申し上げます。平和首長会議のリーダー都市としての役割を願うテヘラン市長宛ての手紙を、ソルシュ会長へ手渡しました。「イランは毒ガス被害に遭っています。広島県には過去、大久野島に毒ガス製造工場もありました。原爆を二度と使わないよう、ともに平和に向かってがんばりましょう」と述べました。これに対しソルシュ会長は「被爆などの経験を世界平和に生かしてきた広島市のおかげで、テヘラン市などが平和首長会議の加盟都市になりました。被爆者は人類に貴重な役割を担い、平和のメッセージを伝えています。イランの6万人以上の毒ガス被害者も同様に強いメッセージを発信し、未来に希望を持って生きたい」としました。

この日、八丁座へ勢ぞろいしたイラン映画監督らが舞台挨拶を行い、その後「ボーダレス」と「大地の子」が上映。「大地の子」のティーチ・インでテヘランの試写会で面会したモハammadアリ・アハンガル監督は、映画監督になった理由は、映画を作るのは簡単だから、とユーモアをまじえ、イラン・イラク戦争時の残酷な状況を語りました。

翌8月6日、平和記念式典会場へ、おそろいの白いポロシャツと帽子で毒ガス被害者・映画監督らがやや緊張した面持ちで現れました。8時15分、黙とうの1分間はヒロシマとイランをつないだ瞬間のようでした。午後から再び平和記念公園を訪れ、改装中の平和記念資料館を見学。館内は見学者でいっぱいでした。その後、「サダコを見たい」と原爆の子の像へ全員で向かいました。映画祭へ向かう途中、灯籠流しを見ることもできました。今回、ボランティアスタッフのイラン人留学生は、映画祭のシンボルのオレンジの鳩と折り鶴を灯籠に描き、映画祭の成

功を願い、川に流してくれたと、写真とメールが届きました。

この日の上映は「絵の中の池」と昨年上映された「母ギーラーネ」。ティーチ・インで「母ギーラーネ」監督のバニエテマドさんへ、観客から「2年連続この作品を見ましたが、今回は去年と違った印象で日常生活のユーモアを感じられました」と。監督は「この作品で世の矛盾を反映させたかった。被害者は治療しても一生身体の痛みは消えない。その母親も心の痛みを抱えながら息子を励まし続ける。みなさん、お母さんを抱きしめてあげてください」と。今回、バニエテマド監督が参加したことから、女性映画関係者3人によるトークショーも行われました。当理事長は「普遍的な愛が表現されているイランの映像を通して(知られざる)毒ガス被害者のことを学んだ方もいらっしやることでしょう」と述べました。バニエテマド監督は「われわれは映画をツールとし表現しているんです」と語り、「今回、同行している毒ガス被害者に『ピース・チャンピオン賞』を贈りたい」としめくりました。

翌8月7日早朝、一行は東京へ。この日、映画祭は閉幕。最終上映作品は日本初公開のアニメ「ジュノー」英語吹替版(ICRC=アニメ・ジュノー制作委員会合作)。ティーチ・インで、「どうして営利目的でないこの作品を制作したのか」と尋ねられ、当理事長は、「映像には毒ガス被害のなどを世間に知らせる力があります。誰が悪いなどは追求しないで、挫折に負けない親の愛が世界に必要なことを表現したくて制作しました」と語りました。質問者は「教育のために英語吹替版も合わせて作られたのですね。テーマは平和ですね。マルセル・ジュノー医師が広島を助けたと同様に、モーストもイランの毒ガス被害者を支援しているのですね」と納得した表情でした。

■ アニメ「ジュノー」(英語字幕版)チューリヒ上映会(9月6日)・バーゼル上映会(9月8日)スイス・日本協会主催 スイス訪問(9月4日～10日)

アニメ「ジュノー」上映で初の満席・立ち見が出る素晴らしい上映会となりました。これは主催のスイス・日本協会会長をはじめ、在ス日本人オーガナイザーの長期にわたるご尽力の賜物です。また今回は赤十字(国際委員会)の人道主義を再確認する旅でもありました。

9月5日夕方、赤十字国際委員会の前身「赤十字社」創設者アンリ・デュナンのお墓参りをしました。これがスイス訪問の最初のミッションとなりました。

翌6日、いよいよチューリヒ市中央の上映会場へ。会場のフィルムポディウム(264席)は有名な劇場です。主催のスイス・日本協会の会長らと挨拶を交わし、すぐ本番入りへ。開場時には大勢の観客が席を埋めました。主催者挨拶の後、当理事長は、開業医の夫とロシアから始めた約10年の海外医療支援活動の試行錯誤で挫折を感じ始めたとき、偶然イラン毒ガス被害者との出会いで「心のクスリ」を学んだこと。その後、被爆直後の広島へ15トンの医薬品を運んだ赤十字国際委員会のスイス人医師マルセル・ジュノーの日記を読み、国・人種を超えて人間愛に生きた生涯をアニメにして伝えようと決意。しかし制作過程で常に苦しい状況にありながら完成させたことなどを語り終えると、拍手がおこりました。その後上映へ。エンディングテーマ曲「いのち樹となりて」が終わると同時に、会場から再び拍手がやみませんでした。

ジュネーブから駆けつけたICRC元派遣員が、上映後、体験談を語りました。彼は初回アニメ制作取材の際、ICRC本部で資料提供にご尽力くださった方で、3度目の再会でした。

また上映後、「津谷静子理事長のへ強い信念に感動しました。スイス人医師マルセル・ジュノーの精神をアニメに描き、若い世代へ継承しようとするモーストの見事なプロジェクトに感謝しています。『無償の愛』がもたらす結果は、今日の世界で高く賞賛されていくことでしょう」という声も届きました。また、大勢の来場者が募金してくださいました。集まった募金は当会のこれまでの活動を思いやり、ぜひ有効に利用してほしいと、主催者から寄付の申し出がありました。この日の観客数はわれわれの予想を上回る約180人でした。

翌7日午後、赤十字社創設者のアンリ・デュナン博物館のあるハイデンへ。この日は月曜日で休館だったにもかかわらず、オーガナイザーの交渉のおかげで入館できました。

翌8日バーゼル上映前、ルツェルンのブルバキ・パノラマ館へ寄り、赤十字に関わる19世紀の高さ10m×横110mのドーム型壁画を鑑賞しました。ドイツ軍に敗退したフランス軍の負傷兵をスイスの村人が看護している様子が描かれ、赤十字の博愛活動を表した最初の作品と言われているそうです。赤十字の紋章も見られました。とても印象的な3D絵画でした。その後上映会が開かれるバーゼルへ向かいました。

上映会場のシュタットキノ・バーゼル(99 席)も風格ある建物でした。日ス協会関係者と合流。ドアの前には大勢の観客が開場待ちしていました。ドアが開くと一斉に席が埋まりました。定員 99 名に対し観客数は立ち見が出るほどの 106 名で、当会初の定員超の意義ある上映会になりました。これは好評だったチューリッヒ上映会のロコミによるものと、帰国後、チューリッヒから報告がありました。ここでも上映後、拍手喝采。バーゼルの会場でも多くの方がアニメ「ジュノー」に感動し、募金をしてくださいました。

一方、上映会にはスイス前大使ポール・フィヴァさんご夫妻がおみえになりました。今回の「ジュノー音楽祭」(当会主催)へ”Swiss Duo”の演奏を仲介くださったのが前大使でした。この春、東京のスイス大使館を介し、当会へ広島公演受け入れの要請があったものです。ご夫妻が、遠方から駆けつけてくださったことは、われわれにとって励みとなりました。前大使ともう1つの縁は、アニメ「ジュノー」の制作にあたり、2008 年頃から完成に至るまで、大使ご在任中に企画書にメッセージをいただいたり、初の試写会をスイス大使館会議室をお借りし、大変お世話になったことから、貴重な再会となりました。(芸術やレストランの由来などはスイス側からの情報を引用)

■「マイ・ハート」記念事業支援 (10月2日)

平和や文化に貢献されているヴィオラ走者沖田孝司さんの「マイ・ハート」記念事業を支援しています。今後も双方向で文化交流を願っています。

■「ジュノー音楽祭 2015」西区民文化センターホールで開催(10月24日)

12 回目となるジュノー音楽祭が 10 月 24 日(土)、広島市西区民文化センターホール(広島市西区)で開かれ、約 400 名が鑑賞しました。今回から、より地域への貢献を願い、音楽監督を当会理事吉田仁美(パイプオルガニスト)が務めました。当理事長挨拶の後、第一部の Swiss Duo による演奏曲目についてわかりやすい説明を行い、スイス大使館から紹介いただいたスイス人二人のフルートとピアノで演奏が開始。第二部は恒例の NHK 広島児童合唱団による平和の尊さを体現した歌声で、会場は楽しい雰囲気になりました。

このチャリティーコンサートの収益は、「愛のジュノー便」プロジェクトの一環でアニメ「ジュノー」DVD を教育施設などへ寄贈します(寄贈先選定中)。

■イランの学生に講義 国連ユニタールで(12月5日)

イランの外交官養成大学院生 10 名らが来広。国連ユニタールから依頼を受け、当理事長が「イランの化学兵器被害者への 12 年間の医療交流—大久野島毒ガス被害者の現状」を講義しました。

まず学生に「広島で化学兵器が製造されていたのを知っていますか？」と尋ねると、学生の一人が「それは中国の南京と関係していますね」と発しました。理事長が「広島は被爆と化学兵器製造経験を持つ世界で唯一の都市なのです」と語ると、別の学生が、父親は化学兵器被害者で、夜中、咳込んでいるということでした。

毒ガス被害に詳しい広島の医師らによると、10~20 年後には後遺症として肺ガンが発症する可能性もあるだろうとのこと。イラン政府と広島大病理研究室井内康輝教授(2006 年当時)との間で共同研究の覚書が調印され、それから 4 年がかりで出版された図鑑「マスタードガス傷害アトラス」(日本語・英語・ペルシャ語訳付)が、資料として学生らへ配布されました。理事長は 2004 年初訪イ以来、イランの毒ガス被害者らを 8 月 6 日の平和記念式典へ毎年招き続け、逆に広島からはイランを訪れ、医療交流を継続していることや、「広島イラン愛と平和の映画祭」を広島市内の映画館で 2 年連続開催したことなどを話しました。

またもう1つの資料は、テヘラン・ピース・ミュージアム(TPM)のパンフレットで、学生の一人が「行ったことがある」と手を上げました。イランにはこれまで戦争博物館しか存在していませんでしたが、広島の平和記念資料館を初めて見たイランの SCWVS メンバーが、イランに初の平和資料館を作ろうと、資料館前田耕一郎館長(当時)を毎年訪ね、真剣にヒアリングを重ねていきました。ユニタールのナスリーン・アジミ所長(当時)にも相談していました。ピース・ミュージアムは、ヒロシマの意見を基に、テヘラン市に 2007 年 6 月完成しました。シリアで化学兵器が使用されたと言われている昨今、TPM の来場者が急増し月間約 1,000 人が各国から訪れているそうです。

一方、2 年前から「広島イラン愛と平和の映画祭」を 2 回開催しています、理事長の講義が終わると質疑応答へ…。すると、ユニタールアジミ前所長が即座に、「個人レベルで心のこもった地道な活動が大切です。まず『許す

心』が必要で、それによって将来がフォーカスされます。過去を語るだけの悲しみの連鎖を断つため、人の命を映画や音楽で表現したり、資料館を整備していくといった活動が、将来のために重要、と学生らに訴えました。

■ 沖田孝司「凜として」(沖田孝司さん作品集コンサート)を支援(12月7日)

平和や文化に貢献されているヴィオラ奏者沖田孝司さんの記念事業に対し10月に引き続き支援しました。

■ 東広島アニメ「ジュノー」上映会 東広島市民文化センターで(12月12日)

「人権フェスティバル 2015 ひがしひろしま」(東広島市生活環境部人権推進課主催)で、トークショーとアニメ「ジュノー」上映が行われました。トークに出演した当理事長と広島 FM「9ジラジ」DJ が、打ちとけた雰囲気の中、被爆直後の広島に15トンの医薬品を運んだアニメの主人公で赤十字国際委員会のマルセル・ジュノー博士にかかわる軽妙なトークで盛り上がりました。

DJの大窪さんも理事長同様、広島の出身ではないものの、偶然アニメ「ジュノー」を知る機会があり、興味を持ち始め、平和公園へジュノー碑を見に行かれたそうです。「このアニメには、実際は目に見えないタイムスリップした二人の女子中学生が出てきて、ジュノー博士のあきらめない精神を体現します。同世代の若い子たちにも、わかりやすいと思いますので、継承の意味で8・6前後に、ぜひこの作品をご覧くださいませ」とアニメ「ジュノー」をPRしてくださいました。当理事長は、「観客のみなさんには、どうやって広島が乗りこえてこられたのか焦点をあてながら、誰が悪いなどの批判はやめて、人道を学んでいただきたいと思います」とトークを終えました。

■ イラン訪問 本出版・映画祭・8・6来広など年間計画打合せ(2月10日～16日)

主に2016年の共同プロジェクトについてテヘラン・ピース・ミュージアム(TPM)で話し合いました。

まず当理事長の著書「イラン毒ガス被害者とともに」を、ペルシャ語へ翻訳、出版もTPMが行うことを再確認し、イランで翻訳者人選が急務となりました。日本で三千部出版された著書は、毒ガス被害者だけでなくさまざまな人の生きる姿を表していることから、イランでも人生が必ず輝くようになれる本となることを願っています。

青年の交流に関して、広島大名誉教授で広島市教育委員長の井内康輝先生が実行委員長を務める青少年国際平和未来会議(IYCPF)へ、来年度もイランの青年参加が可能か仲介を依頼されました。これは今年度、初めてイランから数名の青年が参加し、よい経験が得られたことからです。

また、同じく井内先生が行う遠隔病理診断システム(インターネットやLANにより、遠く離れた場所から標本の観察や評価を行う)をテヘランのシャリアティ大学へ導入を進めていくお手伝いをしたいと思っています。さらに、2012年に初版を発行した「マスタードガス傷害アトラス」の二版原稿データを出版するため、担当医師に再度確認を行う予定です。

またTPMが国立広島原爆死没者追悼平和祈念館への研修を希望しているため、調査することになりました。

それと広島県平和推進プロジェクト・チームから海外の平和構築用に預かっていた「広島の復興の歩み」(ひろしま復興・平和構築研究事業副教材英語版)をTPMのタギプール館長へ寄贈しました。

午後から、2013年に広島市教育委員会の協力を得て、イランの子どもたちの平和教育の研修のために来広した幼稚園園長の幼稚園に隣接したアートギャラリーで開催される「子どもの平和絵展」に招かれました。6歳から9歳が平和を描いた絵には、パステルカラーや明るい色の作品が多く、13年前の子どもの絵展で見た戦車や爆弾を描いていた絵から、着実に平和文化が根付いているようでした。

翌2月14日早朝から、今回出張の主要目的である、8月初旬開催予定の「第3回広島イラン愛と平和の映画祭」の上映作品を選ぶため、イラン側担当者の職場アート・センターを訪れました。この日から2日間で7本の映画を視聴しました。1作目は、第1回目の映画祭で来広したナルゲス・アビアール監督の「Bleath」でした。10分間休憩後、シアターへ戻ると、イランの三船敏郎と評される俳優パルウィズ・パラスティエイさんがサプライズで来場。2016年2月1日から11日まで、テヘランで開催されたイラン最大の映画祭「Fajr International Film Festival」(国内部門)で、主演男優賞を受賞したパラスティエイさんの受賞作品「Bodyguard」と一緒に鑑賞しました。パラスティエイさんは、「広島のみなさんと再会できてうれしいです。モーストの津谷夫妻は、人生には楽しいことはほかにもたくさんあるのに、NPO活動に専念してそれを続けることは素晴らしいことです。私が広島に着いた直後から、ア

テンドしてくださってうれしかったです」と語りました。これに対し理事長は「毒ガス被害者との出会いを描いた本を出版したので、(パラスティエイさんにも)ぜひ読んでほしいです」と。パラスティエイさんは、「広島へ招かれた毒ガス被害者でその後、亡くなった方もおられますが、彼らは広島に行けたことを大変喜んでいました。世界でいろいろな映画祭がありますが、広島のイラン映画祭には毎年行きたいと思っています」。理事長は「私はイランの毒ガス被害者に会い、逆に助けられたと思っています。その恩返しのつもりで、映画祭を10年間続けたいと思っています」と述べました。

その後、今回 Fajr 映画祭エントリー作品の”Delivery”と”Life+1 Day”を鑑賞し、翌 15 日最終日早朝、”Captain Sun”(約 20 年前の革命後の作品)とアクション映画”Mazar-e Sharif”を鑑賞しました。

今回の来広日程は、化学兵器被害者らは、8月3日から8日まで、また映画関係者は映画祭の平和記念式典出席をはじめ、舞台挨拶やティーチ・インに合わせ、8月5日から9日までの滞在予定で、7日は歓迎会を予定しています。ただ、これまで被爆者との対話の集いを続けてきましたが、被爆 70 年で被爆者の高齢化が進み、これ以上開催が厳しくなっているため代案を検討する時となっています。

今回3回目となる「広島イラン愛と平和の映画祭」では、これまで同様、日本ではめったに見るチャンスがないイランの「心の深い映画」を、日本人へぜひ紹介したいという願いです。今後、映画祭実行委員会の話し合いを詰め、8月の本番へ備える構えです。

■学生劇団 en 塾(インドネシア)ミュージカルチケット購入協力 (2月22日)

インドネシアの学生劇団 en 塾ミュージカル広島講演のチケットを購入し海外文化交流事業として協力を行いました。

■愛のジュノー便 DVD 寄贈準備 (3月22日)

今回で3年目となるアニメ「ジュノー」DVD 合計 5 枚を教育機関へ平成 28 年度寄贈するプロジェクトを実施するため、購入し、現在、寄贈校を選定中です。